

報徳博物館

友の会 だより
No.67

箱根湯本の禅刹金湯山早雲寺は、小田原北条氏の祖伊勢宗瑞（北条早雲）ゆかりの寺院であり、今も多くの人が訪れます。

早雲寺の境内には北条氏五代・連歌師の宗祇・尊徳の高弟福住正兄らの墓が並ぶ墓地がありますが、その墓地の入口の近くに、高さ2メートル余の「遊撃隊供養碑」がたたずんでいます（左写真）。この碑は明治13年(1880)6月、正兄たちが建立したものです。

そもそも、遊撃隊とはどのような組織で、箱根とどんな関係があるのでしょうか。さらに、正兄はなぜ遊撃隊の供養碑建立に関わったのでしょうか。

今回は、これらの謎に迫ってみたいと思います。

遊撃隊供養碑

遊撃隊と福住正兄

◆遊撃隊とは

慶応4年(1868)4月11日、徳川幕府の本拠地である江戸城は開城し、新政府軍(官軍)の支配下に入りました。それを不服とする旧幕府軍の遊撃隊の隊長伊庭八郎・人見勝太郎らは部下を率いて江戸を脱出し、下総国請西藩(藩庁は現千葉県木更津市請西)の藩主林昌之助忠崇を頼って、幕府回復のための兵を挙げます。

徐々に勢力を増大させた遊撃隊は海を渡り、小田原藩にも協力を求めますが、小田原藩はこれを拒否。遊撃隊は沼津へ向かいます。5月15日に旧幕府軍の彰義隊が江戸上野で壊滅したことをきっかけに、遊撃隊は江戸への進軍を始め、箱根関所で小田原藩と対峙します。

その最中、小田原藩は一旦、遊撃隊への協力の姿勢をとりますが、結局、新政府側として、遊撃隊と戦うこととなり、5月26日、湯本村の東端、東海道筋の山崎付近で戦闘が開始されました。その日のうちに遊撃隊は敗走。翌日にかけて小田原藩兵らが追撃しますが、この戦いを戊辰箱根戦争と呼んでいます。

◆正兄の奔走

当時、箱根14か村の取締役であった福住正兄は村々の代表として、村人らを戦火から守るために奔走します。

はじめ、箱根は遊撃隊の駐屯地となり、正兄は略奪を免れるために遊撃隊の物資運搬などに協力します。しかし、新政府軍に従うことを明らかにした小田原藩兵が山崎へ進軍を開始すると、正兄は戦火が村におよばぬように防備を固めるとともに、同藩の領民として、これ以上、協力はできないことを意を尽くして遊撃隊側に説明し、遊撃隊からの了解を取り付けました。

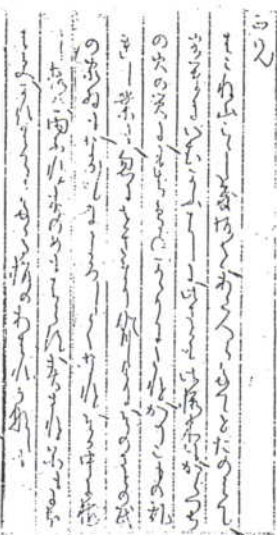
遊撃隊の敗走後、正兄は新政府軍側の厳しい尋問を再三にわたって受けますが、その都度、理路整然と応答し、遊撃隊への協力に関連して責めを負うことはありませんでした。

◆正兄、被災の桜を悼む

遊撃隊の騒動の翌年、明治2年(1869)3月11日、小田原藩の国学・和歌の師範で、正兄の和歌の師でもある吉岡信之が、遊興のため、娘や仲間たちと正兄宅を訪れます。その時の記録が「湯坂に遊ぶの記」と題されて、福住家に残っており、そこ

に、前年の箱根戦争で焼かれた桜の大木を悼んで、正兄が詠んだ長歌が収められています(右写真)。

「はこね山こごしき坂を、あた人らたてとたのみて、官軍にいむかふはしに、此さとも此桜木もかぐつちの火の災に、もち鳥のかかりにたれど、かりこもの乱れし業も、忽にをさまりてけり、そのさとの民の家みも、なか

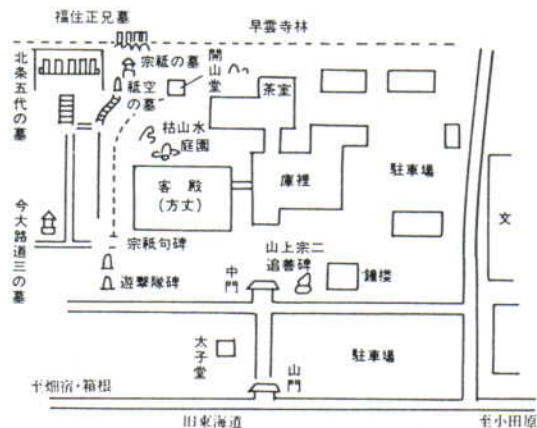


なかによろしくなれど、そが中に枯し桜は、雨ふれど木のめもはず、春されど花にもほはず、かれはててたたる梢のあはれかなしも」

同じように戦火を受けた人家などは復興したものの、焼けたたれ、枯れはててしまった桜の大木を哀惜する内容です。遊撃隊については「賊人」と表現してはいますが、歌の中に、彼らへの批判は感じられません。それどころか、正兄は遊撃隊の戦死者をも追悼する心を持っていました。

◆「遊撃隊供養碑」の建立

下の早雲寺境内図(早雲寺研究会『早雲寺 小田原北条氏菩提所の歴史と文化』箱根叢書16 神奈川新聞社刊より)に見られるとおり、旧東海道に面した同寺の山門をくぐり、中門をぬけると、庫裡に向かって左側の奥に「遊撃隊供養碑」があります。明治13年6月に建立されたその碑は刀の



早雲寺境内図

金泉楼・萬翠楼が重文に



すでに、ご存じの方も多いと思いますが、去る10月18日、箱根湯本の福住旅館の金泉楼（上写真の左側の建物）・萬翠楼（同右側の建物）の2棟が国の重要文化財に指定されました。2棟とも今も客室として利用されています。現役の旅館が同指定を受けたのは全国初とのことでした。

2棟は、福住正兄が大工の棟梁に東京や横浜の建造物を視察させて造らせた木骨石造3階建の擬洋風建築です。金泉楼の着工は明治9年(1876)3月で、竣工は翌10年2月から6月の間と推定されます。萬翠楼は明治10年2月に着工され、その竣工は翌11年12月と推定されます。また、正兄が金泉楼・萬翠楼を建築した動機は、戊辰戦争後に俄か造りした建物が、時代の趨勢にそぐわなくなったことにあるようです。こうした2棟の建設のくわしい経緯については『友の会だより』No.45をご参照ください。

早川の岸边にならび建つ金泉楼・萬翠楼は世間の注目を集め、明治期の文学作品の中にもしばしば登場します。明治19年刊行の末広鉄腸著『雪中梅』は在野の政治活動家の恋愛物語をからませつつ、当時の政治情勢を描いた政治小説ですが、その一節に「溪に臨んで三層の高楼あり、屹然と対立するは世に名高き箱根湯本の福住楼なり」とあります。また、同43~44年に発表された森鴎外著『青年』には、心を寄せる女性を追って東京から箱根湯本へやって来た主人公が「女中に案内せられて、萬翠楼の三階の下を通り抜けて、奥の平家立ての座敷に」通される場面があります。

金泉楼・萬翠楼は平成9年に国の登録文化財となりました。120年以上の風雪に耐えてきた2棟の文化的価値が、今回さらに認められ、重要文化財に「昇格」したことは喜ばしい限りです。

切っ先のような形をしており（表紙写真参照）、表面には、遊撃隊の戦死者のうち、早雲寺に葬られた9人について、この土地の人々が、その十三回忌を期して建碑したことが記されています。選文は人見寧。これは遊撃隊の指揮官のひとりであった人見勝太郎その人です。

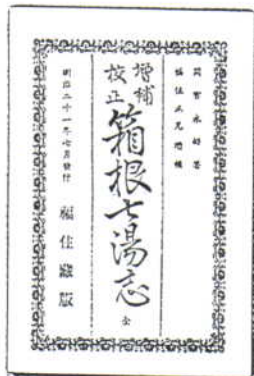
碑の裏面上段には「志願 湯本村中」、同じく下段には「現住乾谷 補助福住正兄 板橋石工植木伝吉」と刻まれています。碑の建立が、湯本村の人々の意志であったことがわかります。乾谷は当時の早雲寺の住職です。碑は、板橋村の石工の植木伝吉によって加工されました。正兄の名前の上に「補助」とあるのは、建碑の実務面で、正兄が様々な働きをしたことを示しているのでしょう。人見寧への碑文執筆の依頼も正兄によるものと思われる。

なお、建碑の翌月の7月25日、戦死者の十三回忌とともに、「撃劔会」が催されたことが正兄の日記に記されています。

◆『箱根七湯志』に見る箱根戦争

国学者の間宮永好が著し、正兄が増補した『増補校正 箱根七湯志 全』は明治21年7月に正兄が発行した箱根に関する

地誌です（右写真）。その中で、正兄は箱根戦争のことを取り上げています。それによりますと、小田原藩が用いた田村矢という「一発に矢五十本づつ発する小砲」が大いに威力を発揮したようです。その田村矢について正兄は「三枚橋の戦争を



見てよめる」と題する長歌の一節で「其石火矢は百八十の鳴雷のまのあたり落るが如く山川をゆすりよよし」と詠じています。そして、「石火矢のおとに聞つる戦ひを今日我さと到我見つるかも」「石火矢のやのうがちたる家戸みれば まづあなとこそ驚かれぬれ」の反歌2首を添えています。

村の安全のために遊撃隊と直接に交渉し、彼らの心情に接した正兄にとって、その戦死者への追悼の念は非常に強いものがあつたのでしょう。正兄のその思いは、周近で展開した戦闘の強烈な記憶とも相俟って、供養碑や詠歌として今に伝えられることとなったのです。

尊徳の肖像

博物館の収蔵資料は、自館内で展示されるばかりではなく、外部からの要請に応じて貸し出されたり、写真撮影されたりする場合があります。それは報徳博物館でも例外ではありません。

報徳博物館の場合、資料に関する外部からの要請で多いのは、写真の撮影・借用です。中でも、小田原藩士で画家としても有名な岡本秋暉が描いた「尊徳坐像」(下写真)の需要が目立ちます。

袷に帯刀、武士の姿で居住まいを正したこの肖像は、一般に最も知られた尊徳像です。袷には二



宮家の紋(石持ち地抜き木瓜)が、小袖には藩主大久保家の紋(上り藤に大の字)がついています。

秋暉は、曾比村(小田原市)の指導者で、同村の仕法推進に力を尽くした

持広吉の依頼を受け、天保13年(1842)夏、江戸の小田原藩邸内で対談中の尊徳を襖の陰からひそかに写生し、この肖像に仕上げたといわれています。尊徳の生家の隣に建つ小田原市尊徳記念館には、この肖像画の下絵とみられる作品が、「尊徳肖像集」の名で保管されています。知らぬ間にその姿を写生された尊徳は、ちょうどその頃、御普請役格として幕府に登用されています。56歳の充実した時期の風貌です。

さて、この尊徳の肖像を使いたいという外部からの要請が多いわけですが、その使用方法は大きく二種類にわかれます。

ひとつは、複製したものの展示です。とくに、栃木県立博物館と野馬追の里原町市立博物館には原本と見分けがつかないほど精巧に作られた複製品が展示されています。これらは、専門の業者が報徳博物館の原本を撮影し、それを絹地に焼き付けた後、原本と見比べながら、手作業で色合いを調整していくという気の遠くなるような作業を経て完成したものです。

もうひとつの使用法は書籍等への掲載で、数

の上では、こちらが圧倒的に多くなります。最近刊行されたものだけでも以下のとおりです。

宇津木三郎著『二宮尊徳とその弟子たち』

夢工房

堀井純二編著『訳註 報徳外記』

錦正社

『わたしたちの神奈川県 平成14年版』

神奈川県

『栃木の自然と歴史 栃木県立博物館展示案内』

栃木県立博物館

『小田原高校百年の歩み』

神奈川県立小田原高等学校

『文藝春秋』12月臨時増刊号

『東京新聞 栃木版』平成14年11月16日付

また、すでに報徳博物館が掲載を許可し、刊行が予定されているものもあります。

『江戸時代歴史館』

小学館

『週刊神社紀行』16号

学習研究社

平成15年2月20日刊行予定

『週刊朝日百科 日本の歴史』82号

平成15年5月23日以降増刷予定

岡本秋暉は手本を模写する粉本主義を嫌ったといわれています。画家として写生を重視するその姿勢を見て、釘持広吉も尊徳の肖像画作製を依頼する気になったのかもしれませんが。

ただし、写生とはいっても、そこには大なり小なり画家の意思が反映されます。依頼主である釘持広吉の意向も無視はできなかったでしょう。写生を基本としながらも、この肖像画には尊徳を取り巻く人々の「思い」が込められているのです。そのことを頭の隅に置いた上で見つめ直してみると、この肖像画から私たちが読み取り得る情報の量は大幅に増えるでしょう。それによって、尊徳の研究そのものも奥行きが広がるはずですよ。

多くの人々の目に触れる機会の多いこの肖像画が、現代人の尊徳に対するイメージの形成に大きな影響を及ぼしていることは間違いありません。そのイメージは、尊徳と同時代に生きた人々のそれと共通するのでしょうか。そんなことを考えてみるのも、時には必要であろうと思うのです。

発行 財団法人報徳福運社

報徳博物館友の会

〒250-0013 小田原市南町1-5-72

電話0465(23)1151・振替00250-6-24450